

井澤知旦教授のご退職にあたって

現代社会学部長 古 池 嘉 和

井澤知旦先生は、2023年3月末日をもって定年退職されました。井澤先生は、2012年に本学経済学部教授として赴任され、2015年に現代社会学部の設立に伴って同学部に移籍後は、2017年4月から2021年3月まで学部長として、現代社会学部の発展のため尽力されてこられました。その後も、2019年4月から「名古屋学院大学 私立大学研究ブランディング事業」の研究統括責任者として、また、2021年4月からは大学協議員として、2023年3月にご退職されるまで、11年に亘って本学に多大なる貢献をなされました。ここに本学および現代社会学部を代表して、井澤先生に深甚なる感謝の意を表します。

先生のご専門は、「建築・都市計画」ですが、私が見る限り、都市、なかんずく名古屋への「まなざし」は、近代都市計画の優等生と称される機能的な都市（空間）への単純な賛美ではなく、人が暮らすに値する場としての評価にあると思われます。それはかつて、ジェーン・ジェイコブズが見たような歴史性や人間性に裏付けられた「場」としての空間であり、例えば街路でも、時に子どもの遊び場となり、人々の憩いの場にもなるように、生活者の多様な暮らしを支える「柔軟な使い方」が大切になります。そのような「路地性」や、それらが創り出す豊かな「界索性」が、戦後、車社会の到来を前提にした近代都市の設計上等閑視されたのは、ある意味ではやむを得なかったのかも知れません。

一方、こうした近代都市計画に対する社会科学からの「異議申し立て」は、代表的なものとして宇沢弘文『自動車の社会的費用』が思い浮かびます。宇沢は人間不在の無機質な計画ではなく、ジェーン・ジェイコブズを参照し、本来、主役であるべき人間を取り戻す視座を切り開いたと言えるでしょう。さらに、氏が提起した重要な概念である「社会的共通資本（ソーシャル・コモン・キャピタル）」は、当初、英訳として採用していた「ソーシャル・オーバーヘッド・キャピタル」を、後に、「コモン」に言い換えているのだが、それは、人間主体の自律的な都市において「共的な場」が欠かせないという含意があるように思われてなりません。

建築・都市計画がご専門の「井澤」先生と、知の巨人である「宇沢」先生の思想に何かしら共通点を見いだすとすれば、それは、近代都市の中で市民が主体となったコモンズとしての場を再生することではないでしょうか。井澤先生が名古屋市で社会実験を行ったオープン・カフェなどは、その好例であり、均質な都市空間をコミュニケーションの場に変えていく試みであったと思われます。

ところでこのような人間味溢れる柔らかい発想の原点は一体どこにあるのでしょうか。それは多分、ご出身の大阪の下町にあり、恐らく幼少期の界限には、はるき悦巳が描いたアニメ「じゃ

リン子チエ」の世界が広がっていたのではないのでしょうか。高校卒業後は、名古屋工業大学への進学がご縁となって、名古屋に並々ならぬ愛情を注ぎ、実践と理論化をめざしてご活躍されましたが、その発想の原点には幼少期の混沌としつつも“妙に調和のある場”にあったのではとわかれてなりません。

加えて、今でも抜けない関西気質は、その文化特有の「ずらし」、すなわち常識的な思考を少しずらしてみることによって生まれる「笑い」の追求姿勢にもみられます。直線的で均質な「白いまち」と言われる名古屋は、確かに効率的で機能的なまちではありますが、反面、ヒューマニティに欠ける面もあります。「面白いまちにするぞ!」という長年の試みは、実践と往還する中で、理論的には『名古屋都市空間論 消毒された都市から物語が生まれる都市へ（風媒社）』の公刊（2023年）で、ひとまず集大成は終えられたと思われますが、ご本人の中では、「これからこれから」との思いが強いものと推察します。

お笑いが地場産業でもある大阪出身の芸人でさえ、名古屋で花開くことが難しいという話を聞いたことがあります。それほど名古屋は、空間は直線的、気質は実直なまちのような気がします。だが一方では、宗春の時代に代表されるように多彩な芸どころでもあります。近代都市の貌の下に見え隠れする先行形態や前近代的な文化の厚みを活かし、「名古屋は面白いまちやなあ」と言われるようになるかどうか、偏に、先生の双肩にかかっているのではないのでしょうか。

これからもますますご健勝でご活躍されますことを心よりお祈り申し上げます。